

奏



2013 SPRING Vol.39



弦楽四重奏の素晴らしさを、

もつと多くの人に伝えたい。

太陽の光が、春の訪れを感じさせてくれるような三月最初の日。前日の二月二十八日(木)にいずみホールで行われたコンサートに出演されたヴァイオリニストのライナー・シュミット氏をお招きし、コンクール&フェスタのプロデューサーである玉越邦彦氏とヴァイオリニストの花田和加子氏が、室内楽の魅力やシュミット氏の室内楽への思いなどをお伺いしました。



ライナー・シュミットさん

**弦楽四重奏は、アンサンブルの基本であり、音楽の根源です。**——シュミット

**玉越** 昨日のコンサートは大変素晴らしかったですね。演奏曲は三曲ともへ長調の曲でしたが、特別なお考えがあった選曲されたのでしょうか？

**シュミット** そうです。今年はいくつもの曲目と並べることには、単に年代順に並べることではなく、我々にとっての興味を持ちたいと考えたのです。それで、大阪でのプログラムは三曲ともへ長調ですが、

弦楽四重奏曲の最初と最後の作品を入れました。また各シリーズの一曲目に焦点を合わせました。作品十八の一曲目、作品五十九シリーズの一曲目、そして、作品百三十五。この作品は、シリーズとして完成出来ずにベートーヴェンは亡くなってしまいましたが、それもシリーズの一曲目というのは、新しいアイディアの最初のもので、とても重要だと思います。それらを一つのプログラムにして演奏することに意味があると考えたんです。

**玉越** なるほど、素晴らしいコンサートですね。今回、春に三日間公演されて、秋にもまた公演はしない予定ですか？

**シュミット** いえ、三度目です。七年毎という計算？

**玉越** そうですね。だから、来年のコンクールは審査することになります。

**花田** そんなサバティカルの間、コンクール以外には何をされているんですか？

**玉越** 先生はハーゲン・クアルテット以外にもバーゼル大学で教鞭を執ったり、ピアノトリオなどもおられるんです。



花田さん

**玉越** 先生はハーゲン・クアルテット以外にもバーゼル大学で教鞭を執ったり、ピアノトリオなどもおられるんです。

た公演される予定なのですか？

**シュミット** そうです。秋にも三日間、残り半分の曲を演奏する予定です。

**花田** そもそもチクルスを演奏されるのは、ハーゲン・クアルテットとしては珍しいことなのではないですか？

**シュミット** 今回が初めてですね。今まではあまりチクルスをやるうとは思わなかったのですが、今年はベートーヴェンのチクルスを是非やってみたく思っていますよ。

**玉越** 昨日は大盛況でしたが、通常の室内楽コンサートはそんなに聴衆が多くないので、関西はつきり室内楽ファンは少ないのかと思っていました(笑)。

**シュミット** 私もたくさんのお客様に来ていただけて、本

すよね。

**シュミット** ええ。バーゼル大学とザルツブルグ大学で教えています。教えることの比重が大きくなってきているのと、クアルテットでやらなければならないことが多くなり、最近ではピアノトリオに割く時間が少なくなってしまいました。サバティカルの数ヶ月間は、指導している学生達の教育に力を入れている予定です。彼等にとって最終学年となっているので可能な限り時間を注いでいくつもりです。

新しい可能性を秘めた若い音楽家を育てるというのにはやりがいのあることです。また、それ以外には新しい作品について勉強したいと考えています。自身自身の勉強する時間を持つことは、私にとっても大切なことなのです。

**玉越** 長期休暇というのにお忙しいですね(笑)。

**シュミット** そうですね(笑)。でも、あまり遠出はしないようにしてはいるんですよ。まだ子供が小さいので、できるだけ自宅で家族と一緒にいるようにしています。

当に嬉しかったです。弦楽四重奏は、アンサンブルの基本中の基本であり、音楽の根源だと思っておりますので、その素晴らしさを多くの人に伝えることが、私たちの使命だと思っております。

**審査委員の願いをできた我々は、本当に運が良かったですね。**——玉越

**玉越** 先生はイタリア・ボルチアーニのコンクールの審査委員や、ミュンヘン国際音楽コンクールの審査委員もされていますが、聴衆の数はどのよう感じですか？



玉越さん

**シュミット** ミュンヘンの聴衆は多いのですが、ボルチアーニは、そもそもホール自体が小さいので聴衆が多いように見えますが、実際はそう多くないと思います。

**玉越** 聴衆を集めるというの

は、私共コンクール主催者側にとっても重要なことです。それと、世界一流の審査委員を集めること、優秀な団体を集めること。この三つの「集めること」が、コンクールの永遠の重要課題ですね。

**花田** 今まではあまりチクルスをやるうと思われなかったのに、なぜ今回することに決めたのでしょうか？

**シュミット** 三年程前、ベートーヴェンチクルスは、一生に一度できれば幸せなことだと気づいたんですね。それで、すぐにメンバーに提案したところ、全員意見が一致し実現することができました。思えば、私達はこの時を待っていたのかもしれません。

**玉越** そんな時はいつも、クアルテットのメンバー四人で話し合っているんですか？

**シュミット** ええ、勿論です。とにかく何でも話し合い、全員で結論を出していますね。来年は話し合いの結果、八ヶ月間のサバティカル(長期休暇)をとることにしました。その八ヶ月間は、クアルテットとしての

PROFILE

敬称略

【玉越 邦彦】

1972年3月、一橋大学商学部卒業。  
1972年4月、住友生命保険相互会社に入社。  
1997年1月、日本室内楽振興財団に就任。  
2012年3月、住友生命保険相互会社を退職。  
引き続き日本室内楽振興財団に勤務。  
第3回(1999年)～第8回(2014年)大阪国際室内楽コンクール&フェスタのプロデューサー。

【花田 和加子】

5歳よりヴァイオリンを始め、15歳で渡英。英国王立音楽カレッジのディプロマを得て、オックスフォード大学にて音楽学を学ぶ。卒業後帰国し、東京藝術大学大学院修士課程を修了、同大学院博士課程にて学ぶ。ヴァイオリンを石井志都子、李亮才、ジョルジュ・バウク、澤和樹の各氏に、室内楽をアマデウス弦楽四重奏団のメンバーに師事。1999年度村松賞受賞。アンサンブル東風、アンサンブル・ノード等のメンバーとして演奏活動を行うほか、各地でマスタークラスや音楽祭の通訳を務める。東京藝術大学、桐朋学園芸術短期大学非常勤講師。サントリーホール室内楽アカデミーフェカリティ。また、(財)地域創造コーディネーターとして公共ホール音楽活性化事業にも携わっている。

【ライナー・シュミット】

人気・実力共に世界最高の弦楽四重奏団として評価の高いハーゲン・クアルテットの第2ヴァイオリン奏者。ハノーヴァー音楽大学でヴァイオリンを学び、シンシナティ音楽院でラサール・クアルテットのワルター・レヴィン氏と出会い、室内楽に目覚める。1987年ハーゲン・クアルテットに加わり、世界各国で演奏活動を続けている。1989年にはラヴィニア・トリオを設立し、ピアノ三重奏団としても活動している。若手音楽家に教えることにも熱心で、これまでザルツブルグのモーツァルテウム音楽院、マドリッドのソフィア王妃音楽院で教鞭をとる。現在バーゼル市音楽アカデミー教授。当コンクールの第5回・第6回で優勝したベネヴィッツ・クアルテット、ドーリック・クアルテットの指導者でもあり、第8回大阪国際室内楽コンクールの審査委員に決定している。

チャリティーコンサート収益金を、岩手の児童養護施設に贈りました。——シユミット

玉越 前回のコンクールは、東日本大震災の二ヶ月後だったので、開催するかどうか、非常に悩みました。

シユミット そうでしょうね。私も複数の参加予定の団体から、参加するべきかどうかと相談を受けました。コンクールの開催地は大阪だったので、同じ日本といえども被災地からかなり距離があるから大丈夫だと伝えました。ただ、ヨーロッパにいる若者やその家族が不安に思う気持は理解できるし、辞退も仕方がないことだと思いました。当時の情報は、それぞれの国の専門



勉強で、お忙しそうですね。

玉越 聞いているだけでも大変そうです(笑)。

シユミット そうですね。でも、舞台上上がってベートーヴェンを弾くというのは至福の時であり、これほど素晴らしいことはないと思っ

ています。また、ハーゲン・クアルテットのメンバーとして舞台上で演奏するというのは、私にとってとても幸せなことです。そのため練習することは全く苦痛には感じていませんね。

花田 ところで、バーゼル大学では、どんなことを教えておられるのですか。

シユミット まず、どの様な形でクアルテットを続けていくかという、基本的なことから指導しています。一昔前のクアルテットのあり方は、一人のいわゆるリーダー的な存在の人

家によってかなり違った見解が流されており、人々は動揺していましたね。正しい情報を早く提供することが、一番大切だったのではないのでしょうか。

玉越 実際、私達日本人もかなり惑わされましたから、その通りだと思います。そんな状況にも関わらず、先生はあの時、スイスでチャリティーコンサートなども実施されましたよね。

シユミット はい。その収益金を岩手県一関にある児童養護施設にお贈りしました。その施設ではドイツ人のシスターが園長をされていますが、地震による被害が大変大きく、子供たちの安全が確保できないという情報が私達の所に届いてきました。収益金は施設の再建に活用していただいたと聞いています。チャリティーコンサートに協力してくれた若い音楽家と聴衆の心が義援金という形で、その施設に送られたわけですね。私達音楽家にとっても貴重な経験となりました。

花田 私達日本人は、様々な国の方々が心配してチャリティーコンサートを実施して

がいて、その他のメンバーはそれに従っていくというスタイルが多かったように思われます。ですが、今日ではもっと民主的な方法でやっていかなければ、若い人たちは簡単に解散してしまうでしょう。どうすれば長く続けていけるか、メンバー間のコミュニケーションの取り方など、いろいろなことを指導しなければならぬのですよ。



花田 先生がおっしゃるように、アンサンブルを組んでいても長く続けていくのは非常に難しいですね。長年活動を続けられているハーゲン・クアルテットでは、どのように工夫されているのですか？

シユミット 一番大切にしているのは、お互いに尊重し合うと

くださったことに感激すると共に、心から感謝しました。シユミット 世界を大きく変える事はできなくても、一人ひとりの人間が思いやりの気持ちを忘れず、小さな事を積み重ねて、世界中が繋がって行くといいですね。



スイスでのチャリティーコンサートチラシ

玉越 前回のコンクールの開催にあたって、関係者全員で頭を悩ませたのですが、何もしないのは却って良くないのではないかとということで、開催することにしました。参加団体にチャリティーコンサートの計画を伝えたところ、たくさん参加希望があり、とても嬉しかったですね。結果としては、開催して本当に良かったと感じていますし、あのような時に開催することこそ意義があったようにも思っています。

シユミット とても難しい決断を下されて、良い結果を得

たということですね。例えば、一人のメンバーが提案するアイデアに対し他の三人が納得できなくても、とりあえず全員で試してみます。最初から拒否するのはなく、互いの意見や考えを受け入れて尊重し、皆で取り組むということを大切にしています。たったの四人ですが、小さな社会の始まりのようなものです。一人ひとりの声に耳を傾け、一緒に取り組む姿勢ですね。そして、人と人との相性も大切だと思います。ハーゲン・クアルテットの場合は、三人が兄弟という特殊なケースですが、相性はとても良いと思っています。外部から私が入ったことで、より上手くバランスが取れているような気がします。

玉越 兄弟といっても、それぞれ性格は違うでしょうね。シユミット そう、まったく違います(笑)。ただ、同じ両親から生まれて同じ環境で育っていますから、物事に対する姿勢や考え方に共通点は多いと思います。そんな彼等と家族外の間が加わり、長年クアルテットを続けていられる

られたというのは、非常に素晴らしいことですね。

舞台上上がってベートーヴェンを弾くというのは、至福の時なのです。——シユミット

玉越 先生は普段からハードな活動状況だと思っ

たのですが、一年の半分位はツアーに出掛けているような状態なのではないでしょうか？

シユミット いえいえ。一年のうちツアーは四ヶ月程度です。あまり多い方ではないと思います。ただ、あまりにも演奏回数が少ないと、ハーゲン・クアルテットは解散したのかと思われてしまいますので、そう思われないうるなギリギリの線で行っています(笑)。でも、年間五十一六十公演程度は行っているんですよ。やるうと思えば、百一二百公演も可能でしょうが、私達には、そうした方がいいと思いは全くないですね。それならば、もっと練習時間に費やして、より良い演奏をしたいと思っています。

花田 ツアー以外にも練習や

のは、各自が音楽のことを一番に考え、キャリアは二の次にしているからだと思います。一人ひとりが音楽を最重要課題として向き合えば、迷った時でも必ず解決していきます。全員が同じ方向を向き、一緒に成長できるというのは、とても幸運なことだと思います。こうしたことは、若い人達にもいつも話しています。音楽を追究する情熱と喜びが、自分にとってさほど重要でないなら、音楽の道には最初から進まない方が良くないと思います。キャリアのためにやるのではなく、音楽のためにやる

ことが最重要であるといつも教えています。

日本のアンサンブル育成機関はわずかですが、あるというだけで大変意味がある。——玉越

玉越 先生はパリのプロクアルテットでも、教えておられるんですよね？

シユミット ええ。プロクアルテットでの活動は、毎年実施しています。これはもう何年



とって、危険なことだと思ったからです。少なくとも一、二年は一人の先生について勉強し、次のステップとして、複数の先生からの指導を受けるという方が良いのではないかと考えています。

**玉越** 素晴らしいご夫婦ですね。ところで、ヨーロッパアンチエンバーミュージックアカデミーでも教えられていたのでは？

**シユミット** はい、素晴らしい学校です。確か二、三度教えたことがあります。とても重要な役割を担当する予定だったので、辞退しました。というのは、すでに素晴らしい指導者もたくさんおられましたし、一度に四人も五人も先生が指導するのは、室内楽を始めたばかりのアンサンブルに

も、オーケストラのオーデイションに行く、当たり前のようにモーツアルトの協奏曲やシベリウスの協奏曲、ブラームスの協奏曲を弾かされます。でも、シベリウスやブラームスの協奏曲は、オーケストラ団員にとって必要かという、特にそうではないように思っています。オーケストラの団員にとって本当に必要なことは、聴く耳、柔軟性、協調性など、アンサンブル奏者として必要とされる特性だと思うのです。でもなぜかオーケストラの入団資格にはこれらが入っていません。室内楽が、オーケストラのオーデイションに取り入れられることを期待しています。

**玉越** 先生のお話しを聞いて、とても心強く感じました。私共もコンクールの充実を通して、さらに室内楽の普及に努めていきたいと思っています。  
**シユミット** 学生達が、共に演奏する楽しさを感じると、どんな興味も湧き、自らの世界を広げて行く原動力になります。若いクアルテットが、各自のパートの役割をまだ理解できなくとも、追求するスリル、

玉越 なるほど。日本ではサントリーのチェンバーミュージックアカデミーが室内楽の育成機関として活動していますが、日本ではまだわずかですが、でも、あるというだけで大変意味があると感じているので、頑張りたいですね。  
**花田** 私もサントリーのチェンバーミュージックアカデミーに携わっています。数年後には、ここからプロの弦楽四重奏団やピアノトリオなどが出てくれれば嬉しいですね。室内楽専門の指導システムとしては、日本では初の試みで、始まったばかりですが、頑張りたいと思っています。

発見する喜び、四人で一つの音楽を作りあげる感動にきつと虜になってしまおうでしょう。時間がかかると思いますが、必ずそうやって行くといいですね。  
**玉越** なるほど。あとは、日本の聴衆がもっと室内楽を楽しみたいようになってくれたら、ということですね。  
**シユミット** 若い魅力的なアンサンブルが育ってくれば、自然と聴衆も増えると思います。結局、私たちがステージの上でしている事は、コミュニケーションです。作曲家は譜面を通して、演奏家は音でコミュニケーションをしています。そして、その作品に込められているメッセージとエネルギーが、『波動』として聴衆の耳に届き、そして心に響くのです。演奏家は仲介者として、作曲家のメッセージに感動し、音として聴衆に届けられる感動も頂戴できる。二重の感動を感じられる我々演奏家は、ラッキーだと思いませんか？  
**玉越** お話しをお伺いしていると、とてもワクワクしてきました。本日は本当にありがとうございました。

若くて魅力的なアンサンブルが育ってくれば、自然と聴衆も増えてくる。——シユミット

**シユミット** 私がザルツブルグのモーツアルテウムで教え始めから、かれこれ二十五年程になります。その当時、室内楽教育はそれほど重要視されていなかったように思います。でもこの数年で、ヨーロッパの音楽大学では、室内楽の重要性が再認識され、大学院修士課程に室内楽科も設置されるようになりました。こうした流れは、スペインのマドリッドから始まったのだと思っています。

私が二〇〇二年にマドリッドのソフィア王妃音楽院の、弦楽四重奏専門コースで指導し始めた当時は、ヨーロッパにある音楽大学での室内楽専門コース、または修士課程のコース等はまだ設置されていませんでした。ソフィア王妃音楽院は、他のどこよりも先に室内楽専門コースを作り上げたことを誇りに思っています。以前、大阪やポルチアーニのコンクールでお世話になり、現在、若手クアル

テットとして活躍しているベネヴィッツ、カザフスタン、アルデオ、キローガ、そしてドリック等は、マドリッド時代に指導していた教え子です。今では、ケルンやザルツブルグ、バーゼルにもありますが、あのマドリッドのコースから広まっていたのだと思っています。  
**花田** 室内楽専門学科の重要性は、マドリッドから波及したのですね。  
**シユミット** そうだと思いません。昔は、バイオリン、ピアノ、チェロの先生といった室内楽の専門でない先生方が室内楽を教えているような状態だったので、あの辺りから変化しように思います。今では、ヨーロッパの多くの学校で室内楽専門学科が設置されるようになってきました。

**花田** まだまだ遅れてはいませんが、日本でも同じような動きが見られますね。  
**シユミット** 個人的にも室内楽を学ぶというのとはとても重要だと思われ、オーケストラのオーデイションにもぜひ取り入れられるべきだと思っています。

## 第8回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 参加団体募集の記者発表

第8回大阪国際室内楽コンクール&フェスタの実施内容の詳細が決まり、3月13日ホテルグランヴィア大阪で、記者発表が行われました。当日は、コンクール審査委員長の堤剛氏が、8回を迎えるコンクールの意義と課題曲等の変更点を、日下部吉彦審議委員長からは、フェスタの聴衆審査の意義について説明しました。



### 第8回コンクール&フェスタの概要 (<http://www.jcmf.or.jp/competition>)

- 実施期間 2014年5月13日～2014年5月21日
- 会場 いずみホール
- コンクール部門

部門	編成	賞金
第1部門	弦楽四重奏	1位 300万
		2位 150万
		3位 100万
第2部門	ピアノ三重奏 及び ピアノ四重奏	1位 300万
		2位 150万
		3位 100万

- 2.応募資格 16～35才の演奏家のアンサンブル。
- 3.課題曲 弦楽四重奏、ピアノ三重奏及びピアノ四重奏の中から、各審査委員からアイデアを募り、コンクールに相応しい曲を選定しました。

- 4.審査委員 日本からは堤剛、藤原英雄、川本嘉子、梅本俊和の各氏が、海外からはライナー・シユミット、シャンドール、デヴィッチ、バスカル・ロジェ、ジェイムズ・ダナム氏等、室内楽に造詣が深く世界的に著名な音楽家が就任されています。

#### ●フェスタ部門

部門	編成	賞金
フェスタ	2～6人のアンサンブル 楽器の組み合わせは自由	メニューイン賞 200万
		銀賞 100万
		銅賞 60万
		フォークロア特別賞 30万

- 2.応募資格 参加者の年齢・国籍は問いません。
- 3.課題曲 自由。但し、演奏時間は、30分以内。
- 4.審査 約1,000名の一般聴衆による審査を行います。

# 音楽文化をささぐる

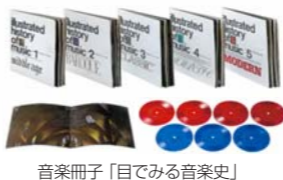
ROOM株式会社 メセナ推進室 室長 谷口 享

公益財団法人ROOMミュージックファンデーションは佐藤研一郎氏(現、ROOM株式会社名誉会長)、ROOM株式会社及びROOMグループ各社からの基金の拠出により設立されたのが一九九二年(平成三年)二月のことです。音楽文化活動を支援していくことを目指した財団の活動は、「京都・国際音楽学生フェスティバル」や「ROOMミュージックファンデーション音楽セミナー」などの多彩な事業の展開、音楽を学ぶ学生に対する奨学金の給付などを活動の柱にして地道ではあるが、盤石の態勢で着実にその成果を上げています。ROOMのメセナ活動とROOMミュージックファンデーションの運営に携わってこられた谷口享氏に筆を執っていただきました。



半導体メーカーのROOMと音楽文化とのかわりは、今から約五十年前に遡ります。

一九六五年の音楽冊子「目でみる音楽史」(全五巻ソノシート付)をスタートに、一九七〇年に「楽器の歴史」(全四巻カセット付)、そして一九八二年に「アジアの音楽史」(全四巻カセットテープ付)を発行しました。これらはROOM株式会社(一九六五年当時は株式会社東洋電機製作所、一九八一年にROOM株式会社)に社名変更の企業広報誌として、音楽を多くの方々に気軽に楽しみたいという思いから発行しました。一九八九年にはROOM株式会社創立三十周年を記念して「ROOM君の音楽会 パッパスペシャルP



音楽冊子「目でみる音楽史」

お客様にご来場いただけるのか?満席にできるのか?不安を抱えたままのスタートでしたが危惧に終わりました。音楽学生の若さ溢れる純粋な演奏が、多くのお客様の共感を呼び、そしてお客様の若い音楽学生たちを応援する暖かい気持ち溢れるコンサートとして、毎回、多くの方々にご来場いただいています。次にROOMミュージックファンデーション音楽セミナーです。

このセミナーは世界的に活躍している音楽家を講師に迎え、プロの音楽家の育成を目的に開催しています。一九九二年より弦楽器クラス、一九九八年から管楽器クラス、そして二〇〇三年からは指揮者クラスを各々開催、二〇〇二年までで二十二回、約四百名がセミナーを受講しました。このセミナーも約二十年を経て、過去の受講生の方が現在、国内外のプロのオーケストラのコンサートマスターや首席奏者として、また指揮者やソリストとして世界各国で活躍されています。

小澤征爾音楽塾の公演の支援も音楽家育成活動の一つとして二〇一二年より実施(ROOM株

LAY BACH)を開催し、その後も継続して各種コンサート等を開催・支援しています。そして、継続的な音楽文化への支援を行っていくため、一九九二年に音楽文化の普及と発展に寄与することを事業の目的とした財団法人ROOMミュージックファンデーション(現在、公益財団法人ROOMミュージックファンデーション)を、佐藤研一郎(当時、ROOM株式会社社長・現在、ROOM株式会社名誉会長)とROOM株式会社が主体となって設立しました。

ROOMミュージックファンデーションの活動の基本は、音楽家の育成と音楽ファン(聴衆)の拡大です。これら双方が相まって音楽文化の普及と発展

ROOM株式会社は二〇〇〇年より実施)しています。小澤征爾氏の「若き音楽家たちに、今までの自分の音楽経験をぶつけ育てていきたい。」との思いに賛同し支援しています。



ROOMミュージックファンデーション音楽セミナー2012(指揮者クラス)

そして音楽を学ぶ学生たちにして奨学金を給付しています。

この制度は、一九九一年より開始、現在まで約四百名の音楽学生に奨学金を給付してきました。音楽学生たちに経済面で不安を少しでも軽くし、勉学に集中できる環境を作ることで、優れた才能ある音楽家を一人でも多く育てたいという思いから、現在、一人に対し年間三百六十万円を最高額とし奨学金を給付しています。過去に奨学金を給付させていただいた方には、榎本大進さん、神尾真由子さん、下野竜也さんはじめ、

がつながると考えています。では、ROOMミュージックファンデーションの特徴的な活動をいくつか紹介させていただきます。まず、京都・国際音楽学生フェスティバルです。

このフェスティバルは一九九三年より毎年、開催しています。音楽を通じた国際交流と音楽家の育成を目的に、世界の音楽学校で学ぶ学生たちを毎年五月に京都に招き、二十回を迎えた二〇一二年まで、日本を含む世界二十か国から約二千三百名の音楽学生が参加しました。このフェスティバルの特色は、異なる音楽学校の学生同士がアンサンブルや



京都・国際音楽学生フェスティバル2012(フィナーレ)

オーケストラのメンバーとして、コミュニケーションを図りながら演奏を作り上げるところにあります。あえて指導者は置いていません。異なる教育を受けてきた音楽学校の学生たちが一緒に演奏することは、学生たちにとって学ぶことも多く大変意義深いものといえます。またフェスティバルには多くのお客様にご来場いただいています。当初、このフェスティバルの企画にあたって一番気に止めていたのは学生のコンサートにどれだけの

世界を舞台上に活躍されている多くの方々がおられます。このようなROOMミュージックファンデーションの音楽家を育成する活動との繋がりのなかで、世界に羽ばたかれた皆さん一人一人が、ROOMミュージックファンデーションの誇りであり宝です。音楽ファンの拡大に向けた活動の一つは二〇〇八年より実施(ROOM株式会社は一九九九年より実施)している新国立劇場高校生のためのオペラ鑑賞教室への支援です。感受性豊かな高校生に本物のオペラに接してもらい、音楽を親しみ愛するファンを増やしたいという思いから支援しています。また、指揮者小林研一郎氏がステージから演奏曲に関するエピソードなどについて直接語りかけられ、音楽をより親しみをもって楽しんでいただける日本フィルハーモニー交響楽団「コバケン・ワールド」シリーズへの支援を二〇〇九年より実施(ROOM株式会社は二〇〇四年より実施)しています。

ROOMミュージックファンデーションは、これからも音楽を愛する人たちを増やす活動を続けていきます。

ROOM株式会社は、これまで五十年に渡り京都の文化の殿堂として皆様に親しまれてきた貴重な文化遺産である「京都会馆」が、日本を代表する文化の殿堂として再整備される事業のため、再整備後五十年間の命名権を五十二億五千万円で取得しました。命名権取得の理由は、京都市に本社を置き継続的に社会貢献としての文化支援活動を行うROOM株式会社のニーズに合ったことです。再整備後の京都会馆が、今まで以上に多くの皆様に愛され活用される施設になることを願っています。

その他、ROOM株式会社の本社の所在地である京都での音楽文化支援活動として、京都市交響楽団の演奏会、京都の秋音楽祭開会記念コンサート等への継続的な支援を通じて、地域の音楽文化の普及に取り組んでいます。ROOM株式会社そして公益財団法人ROOMミュージックファンデーションは、これからも、音楽文化活動を通して豊かな文化を作ることを目指します。

## 【プロフィール】

1982年 ROOM株式会社入社  
現在、ROOM株式会社メセナ推進室室長  
公益財団法人ROOMミュージックファンデーション事務局参事



# パロディ・オーケストラって定年あるの？

公益社団法人日本演奏連盟専務理事  
公益財団法人東京交響楽団最高顧問

評議員長

金山 茂人

一般論としてサラリーマンの定年は殆ど避けられない人生における一大イベントといえよう。

よく音楽ファンから「オーケストラも定年ってあるの？」と訊かれるが「皆さんと同じですよ」というと意外な顔をされる。まだまだ市民権を得ていない証かもしれない。

元来プロの音楽家というものは日頃の生活そのものが大変



【金山茂人 (かなやま しげの)・プロフィール】  
1940年富山県生まれ。  
1963年国立音楽大学を卒業後、ヴァイオリン奏者として財団法人(現、公益財団法人)東京交響楽団に入団。1976年4月代表代行(統括責任者)。翌年代表に就任。1980年9月より2005年2月まで専務理事・楽団長を歴任後、理事・最高顧問となり、2011年4月より最高顧問、評議員長となる。  
一方、2005年4月に社団法人(現、公益社団法人)日本演奏連盟専務理事に就任。その他、多くの関連団体で要職に就任している。  
各種受賞歴あり。著作、講演活動も多い。

厳しい修業と鍛錬の世界だ。例えばオーケストラの楽団員を目指すように努力をしなければならぬ。楽器によっては一人の募集に対して百人前後の応募があることも珍しいことではない。入団後も大変だ。特にソロ楽器である管楽器は入ったからといって安心して練習を怠るとすぐに通用しなくなる。この様な輩が増えると結局楽団その

ものの評価が落ちるばかりか、個人的にも定年どころか年齢に関係なく肩たたきが行なわれかねない。日頃からミスが目立つ楽員はとても可哀想な立場になるが誰も同情しない。下手な技術を聴衆の前でさらけ出すことによって、誇り、見得、外間も吹っ飛んでしまう。逆に優秀な奏者は楽団員、お客様から羨望と尊敬の眼差しで見つめられ、喝采をあびることとなる。弦楽器でいえばコンサートマスターが奏でる素晴らしいソロに対して惜しみない拍手を受けるが、その他の楽員に對しても同様にコンサート終了後、お客様からのブラボー！は音楽家として最高の生き甲斐を感じる瞬間だ。



東京交響楽団

ンになり定年が見えてくると、どうしても体力、気力が衰えてきて今までの努力が続かなくなる。その分生活のこともあり身を守るためか定年延長を主張し始める。若くて元気な頃はあれ程定年制発足を熱望していたはずが、いざ自分の番がくると抵抗する。もっと困るのは定年が近づくと、オレはもうこの年になったのだからクビに

はならないだろう、と思い始めると厄介だ。それまでの精神的プレッシャーがそれほどこつ

かったといえはそれまでだが、同情もしておれない。かといって楽団側は、今更クビにも出来ないということ演奏レベルを落とさないためにやむなく「窓際楽団員」を作ることになる。

つまり楽団員でありながら肩書きはそのまま、コンサートにはそれ以降いっさい出演する必要なしというレッテルを貼られ、基本給のみで自宅待機させられる。当然



ロビーコンサート

欠員が出たと同じになるわけだから、そのセクションは再募集せざるを得ない。楽団側も大変な出費となる。ここまですれば彼らは誇り高い音楽家なのだから「月給泥棒！」と陰口を叩かれ、この屈辱的な扱いに耐え切れず自主的に退団するだろうと周りは期待する。だが「窓際…」は叩かれ慣れしているのか精神もタフで決して弱音を吐かず、辞めようとしないうちにか定年の最後まで踏ん張っ

て給料は無論、ボーナス、退職金をガツポリ？受けとって退団ナサル！

だが忘れてはいけないのは音楽家全体にいえることだが、我々の仕事は誰のために存在するのか？ということだ。何のために株式会社ではなくて芸術団体の多くは公益法人なのか。無論株式会社

にも社会的役目というものはそれなりにあると思うが、公益法人の役割、目的についてどのオーケストラにも定款に「この法人は

交響楽の普及向上に関する事業を行ない、わが国芸術文化の発展に寄与することを目的とする。」とはっきり明記してある。何処にも音楽家を守るためにこの団体があるとは掲げてはいない。まあ元々採算は度外視せざるを得ない業種だが、その分日頃、まだまだ足りないといふ句ばかりいって嘔み付いているとはいえ、国は及ばずながら芸術団体を助成したり免税措置をもって優遇してくれている。

平たくいえば、我々の演奏会の目的は自己満足ではなくて聴きに来てくださるお客様が満足してお帰りいただくことに全力を傾けなくてはならないということだ。定年制が発足した当初は六十歳から年金が支給されていたが、ご存知の如く今年年金支給年齢はこのところギリ、ギリと繰り上がり、その対応に日本中の企業が四苦八苦しているとか。無論オーケストラも例外ではなく、このままでは貧困な退職用財源もギリ貧になることは目に見えており、先の見通しも立たないのが現状だ。そんな事情もあり最近耳にすることは、定年時すぐに退職金を支払わないでお互い話し合って定年退職延長を持ちかける。だが今まで音楽しかやったことがない楽員に苦し紛れに無理やり事務の手伝いみたいなことをさせようとする、事務局側からささず、冗談じゃないよ、幹部連中は俺たちの仕事を何と心得ているのだ！そんなに軽々しいものかよ、とソッポを向く。

文化はヨーロッパのように自然発生的民意の発想ではなくて、戦後音楽家自ら自分達の意志で設立された団体が大部分である。いふなれば国民的コンセンサスを得ないで芸術家主導の元で設立された。案の定、世間からは自分達が好きにつくった団体なのだからどうぞご自由にと思われているのか、何十年にわたって永田町、財界に足しげく助成金アップや寄付をお願いに行ってもいまだに満足な答えが得られないことと無関係とも思えない。しかし長年経済大国を自負してきた日本が肝心の経済にはころびが見えはじめた今日、この際芸術文化を全面に出し、いふなれば「文化維新」を詠い、希望に満ちた文化国家を目指す坂本龍馬みたいな御仁が出現しないものか。一方我々自身の責務として日本のオーケストラがより発展を目指し世界に羽ばたこうとするには、定年制の充実も大切なが、楽団員一人一人が如何にして個人の責任を自覚し、自らを厳しく管理出来るかに関わっているかと思う昨今である。

# 名曲と私 J・S・バッハ 無伴奏チェロ組曲

富岡 久生 (とみおか ひさお)

〈プロフィール〉  
 昭和22年 広島県生まれ  
 平成12年 大阪府文化課長  
 平成14年 財団法人大阪21世紀協会総務部長  
 平成20年 財団法人消防試験研究センター大阪府支部長等を歴任  
 現在 社会福祉法人大和福祉会理事



も哀しみも、生も死も、怒りや争いも、この世のものを全て包み込むような世界だ。選歴から六年が過ぎようとしている今、振り返れば、子供の頃から周りに音があった。もの好きな父が当時としては珍しい大きな蓄音器を家に置いており、SPがかかっていた。「運命」の一部か何かだったのだろう。成長するにつれても、常に身近に音楽があったし、これからも音楽の無い生活は考えられない。以来、恐らく古今の名曲と言われるものは網羅的に聴いたであらう。凡そクラシックの範疇にあるものはジャンルを問わず演奏会に行き、LP、CDを収集して「名曲」を求めてきた。名曲は創られた時から存在しているから「名演」を求めていたのかも知らない。



四十年代以後LPから移行して聴いてきたCD

要オーケストラが相次いで来阪した。二十代前半のこの頃は、管弦楽に夢中の十代の延長線上で、食べるようにホールに足を運んだものだ。印象に残るのは、シベリウスの第二交響曲(ジョージ・セル率いるクリューヴランド管弦楽団)で、その後四十数年間にこれ以上の名演を知らない。演奏会で身体が震えるほどの感動を覚えたのはこの時が最初である。

もパロク等小編成のものや管弦楽曲以外の器楽曲、室内楽曲が聴きやすくなってきた。このような名曲(名演)を訪ねる遍歴を経て、J・S・バッハの無伴奏チェロ組曲(BWV1007~1012)に辿り着いた。嬉しい時、悲しい時、イライラする時、寝る前もこれを聴くと心安らぎ、落ち着かせてくれる。一〜六番まで通して聴くが、時間がない時は二番か三番だけのこともある。

自筆楽譜が存在しないこの作品は、バッハが三十二歳から三十八才にかけて書いたものとされているが、とても青年期の作とは思えない精神的な高さ、悟りの境地とも言える生命・世界・宇宙への深い味わいを感じる。数十年来の収集品には、シユタルケル、フルニエ、カザルス、トルトゥリエの四セットがあるが、いつも手にするのは最初に買ったシユタルケルに決まっている。組曲全体の演奏会にはまずお目にかかることはないが、ほとんどのチェリストが、誰の協奏曲を弾いても、この組曲の中からアンコールに応えるのも、無伴奏であることもあるが、真に「名曲」ゆえのことであらう。

今日もシユタルケルの弾くバッハの無伴奏チェロ組曲を聴いている。五十一歳で亡くなった父の歳を超えた頃からこのCDがオーディオを占領している。何の指示もない単調な譜面からは想像もできない、神業の弾き手から表現されるのは、喜び

十代まではとにかくオーケストラが大きき音で鳴っていたけれど良かった。作者や奏者は誰でもよかったが、生き様に心を動かされたオットー・クレンペラーが指揮するものに集中した時期もある。千里万博の前後は海外の主

二十代後半から三十代にかけては、なぜかシヨスタコフウィッチの交響曲全曲やストラヴィンスキのバレエ曲ばかり聴いていた様に思う。四十代に入ると突然マーラー、ブルックナーの交響曲に入れ込んだ。五十代以降になると、管弦楽

フェスティバル・インライプツィヒ二〇〇三に出演してC.P.E.バッハ「チェンバロ協奏曲Wq1」の世界初演を果たした。二〇〇六年からはクラシカル楽器による演奏を始め、二〇〇七年には同じくクラシカル楽器によるF・J・ハイドンのオラトリオ「四季」を演奏。「大阪文化祭賞グランプリ」を受賞。二〇〇八年にはクラシカル楽器による「ベートーヴェン交響曲全集&荘厳ミサ曲」の連続公演により、延原氏はドイツから功労勲章を授与された。ここにいうクラシカル楽器による演奏とは古典派の時代に使用された楽器およびそのレプリカを使つての演奏を指している。これまでの活動に対する国内外からの顕彰実績は枚挙に暇がない。



テレマン室内オーケストラの演奏風景

## 大阪の楽団探訪

日本テレマン協会は、今年が協会設立五十周年にあたります。傘下にテレマン室内オーケストラ、テレマン室内合唱団、日本テレマン協会後援会を擁し幅広い活動を展開しています。独自の音楽世界を有して活発な演奏活動で世間の耳目を集めるテレマン室内オーケストラの実態を中心に、半世紀に及ぶ活動の経緯と次なる半世紀に向けた活動の指針を気鋭の若きリーダー・中野順哉代表にお聞きしました。

### テレマン室内オーケストラ

楽団名にはテレマンの名を冠した。後期パロク音楽のドイツ人作曲家、ゲオルク・フィリップ・テレマン(二六八―一七六七)への延原氏の深い思い入れの現れであった。テレマンの「人が喜ぶために作曲している」という言葉は延原氏の心の琴線を大きく揺さぶった。テレマン室内オーケストラの演奏活動

新たな旅立ち  
 初対面のあいさつもそこそこに中野代表はまもなく始まる五十周年の事業企画「大大阪ターフェル・ムジーク」(ターフェル・ムジークは「食卓の音楽」と訳されている)について語り始めた。

二〇〇三年はテレマン協会創立五十周年、積み重ねた五十年を経て、新たな旅立ちの年である。政治、経済が優先し、文化の側面への視点が希薄になりがちな日常のなかに、心の飢えや渇きを癒すための「サロン」を設け、共通語としての音楽でいくつもの「サロン」をつなげて「共感」の場を作ることを目指している。

講演・講演・音楽のコラボレーション、開催場所、開催規模などどれを見ても常識の想定外の企画を立て的に組み合わせた事業はこの四月末から六月半ばまで約二ヶ月に亘り関西各地で行われる。テレマンの作品に出会って

テレマン協会は一九六三年三月、当時、大阪音楽大学の学生であった延原武春氏によって設立された。協会の設立と同時にスタートしたテレマン室内管弦楽団が目指したものはパロク音楽の普及・啓蒙と楽しさをテーマに新しい演奏会の可能性を追求しようとするもので、パロクからベートーヴェンまでを専門とする我が国でもユニ

テレマン室内オーケストラは当初、オーボエ奏者の延原氏が中心となつて、演奏活動をはじめた。定期演奏会、マンスリーコンサート、教会音楽シリーズなど多彩な活動の始まりである。定期演奏会は一九六三年の第二回から数えて、昨年十二月までで二百九回に及んでいる。最近では公演回数も年間六回前後に及び、会場も大阪を拠点にしてはいるが、近年では東京での公演が急増している。演奏曲目は「マタイ受難曲」(テレマン)、「プロクセス受難曲」(マテゾン)、テレマン、ヘンデル、カイザーが競作)から「レイクイエム」(モーツァルト)、「天地創造」、「四

初、オーボエ奏者の延原氏が中心となつて、演奏活動をはじめた。定期演奏会、マンスリーコンサート、教会音楽シリーズなど多彩な活動の始まりである。定期演奏会は一九六三年の第二回から数えて、昨年十二月までで二百九回に及んでいる。最近では公演回数も年間六回前後に及び、会場も大阪を拠点にしてはいるが、近年では東京での公演が急増している。演奏曲目は「マタイ受難曲」(テレマン)、「プロクセス受難曲」(マテゾン)、テレマン、ヘンデル、カイザーが競作)から「レイクイエム」(モーツァルト)、「天地創造」、「四

二〇二二年には延原氏が音楽監督となつたのを機に中野順哉氏が後任の代表に就任した。さて、オーケストラの活動である。楽団員は現在五十九名である。楽団結成以来、半世紀に及ぶ精力的な活動で赫々たる実績を残している。

一九九〇年、パロク・ヴァイオリンのサイモン・スタンディジ氏をミュージック・アドバイザーに招き、パロク楽器による演奏を始めた。二〇〇〇年四月には、チェンバロの第一人者である中野振一郎氏がミュージック・ディレクターに就任した。二〇〇三年にはドイツのバッハ・アルヒーフの招きで「バッハ

二〇〇九年に現在の楽団名に改めた後、二〇二二年には、パロク・ヴァイオリンのU・ブンディーズ氏が首席客演コンサートミストレスに就任。「ドイツ系古楽」の構築に力を入れ、ドイツにおいて同楽団の高田泰治氏とのデュオ活動を行っている。ここにソロコンサートミストレスの浅井咲乃氏が加わり、延原武春―高田泰治―浅井咲乃の柱ができた。更なる活動の場が待っている。

二〇〇九年に現在の楽団名に改めた後、二〇二二年には、パロク・ヴァイオリンのU・ブンディーズ氏が首席客演コンサートミストレスに就任。「ドイツ系古楽」の構築に力を入れ、ドイツにおいて同楽団の高田泰治氏とのデュオ活動を行っている。ここにソロコンサートミストレスの浅井咲乃氏が加わり、延原武春―高田泰治―浅井咲乃の柱ができた。更なる活動の場が待っている。

二〇〇九年に現在の楽団名に改めた後、二〇二二年には、パロク・ヴァイオリンのU・ブンディーズ氏が首席客演コンサートミストレスに就任。「ドイツ系古楽」の構築に力を入れ、ドイツにおいて同楽団の高田泰治氏とのデュオ活動を行っている。ここにソロコンサートミストレスの浅井咲乃氏が加わり、延原武春―高田泰治―浅井咲乃の柱ができた。更なる活動の場が待っている。

二〇〇九年に現在の楽団名に改めた後、二〇二二年には、パロク・ヴァイオリンのU・ブンディーズ氏が首席客演コンサートミストレスに就任。「ドイツ系古楽」の構築に力を入れ、ドイツにおいて同楽団の高田泰治氏とのデュオ活動を行っている。ここにソロコンサートミストレスの浅井咲乃氏が加わり、延原武春―高田泰治―浅井咲乃の柱ができた。更なる活動の場が待っている。

二〇〇九年に現在の楽団名に改めた後、二〇二二年には、パロク・ヴァイオリンのU・ブンディーズ氏が首席客演コンサートミストレスに就任。「ドイツ系古楽」の構築に力を入れ、ドイツにおいて同楽団の高田泰治氏とのデュオ活動を行っている。ここにソロコンサートミストレスの浅井咲乃氏が加わり、延原武春―高田泰治―浅井咲乃の柱ができた。更なる活動の場が待っている。



# 音楽雑感



大阪大学大学院文学研究科教授

伊東 信宏

伊東信宏（いとう のぶひろ）プロフィール  
一九六〇年京都府生まれ。大阪大学文学部卒業、同大学院修了（文学博士）。スト音楽院（ハルバフ）などに留学。大阪教育大学、大阪大学准教授などを経て、現職。著書「バルトーク」（中公新書、一九九七年）で吉田秀世賞、「中東欧東の回想」（毎度書局、二〇〇九年）でサントリー学芸賞を受賞。近刊書に「バルトークの民俗音楽編曲」（大阪大学出版部）がある。

## シェルシとジョンポヴィッチ

ジャチント・シェルシという作曲家がいた。一九〇五年、イタリアの裕福な貴族の末裔として生まれ、自邸で家庭教師から「フェンシングとチェスとラテン語」を習った、という人物である。生涯生活のために稼ぐ必要はなく、作曲も独学だった。若い頃にはウィーンでシェーンベルクの弟子に十二音主義による作曲法を学ぶが、おそらくはその故に深刻な精神的危機に陥り、数年間ほとんど作曲を止めてしまう。ドイッ的な十二音主義は、彼と本質的に相容れないものだったのだろう。その間、彼はほとんど廃人同然となり、サナトリウムに置いてあったピアノの前に座り、同じ音だけを叩き続けていた、という。

これはしかし一種の自己治療として作用し、彼は快癒す

うものの一つの現れなのだ、と言うこともできる。だが、やっぱり彼は単なるディレクタントであり、他人が書いた音符に自分の署名をして自作として発表したのはスキヤンダラスな詐欺行為だ、と言うこともできる。が、いずれにせよ気になる作曲家であることは確かだ。そういうシェルシをモデルとした小説が面白い、といって、以前この欄でも触れたヴァイオリニストのコパチンスカヤが送ってくれた。ガブリエル・ジョシポヴィッチという作家の書いた『無限大』という中篇である。ジョシポヴィッチは、地中海東岸とロシア、イタリアあたりの血が入ったユダヤ系の作家で、ニースで生まれ、エジプトで育ち、イギリスの大学で学んで、英語で小説を書いている。「パヴォーヌさん」と呼ばれる作曲家（これがシェルシをモデルとしていることは著者自身が本の末尾で明記している）が主人公だが、物語は全てこの作曲家のもとで働いていたマッシモという男の口から語られる。パヴォーヌ氏が繰り返す

るのだがその後、彼が書いた音楽は「一つの音だけを用いた作曲」とも言えるものになる。一九五九年の『一つの音をめぐる四つの断片』という作品は、第一曲「ファ」、第二曲「シ」、第三曲「ラ」、第四曲「ラ」だけを用いた管弦楽作品である。一音だけといっても、様々な音色、様々な音域で用いられるほか、半音の半分（四分音）の幅を持つて音は変化する。結果的にこのような二つの音をあらゆる角度から聴き込むという態度は、後に彼の元を訪れたフランスの若い作曲家達に影響を与え、これが現在のフランス作曲界の主流とも言える「スペクトル楽派」のさがけとなった。

偉大な作曲家、ということになるが、同時に彼には様々な噂がつきまとう。その最悪のものは、シェルシの協力者であった作曲家が、シェルシの死の直後に突然発表した文章である。そこではシェルシの創作の実態（と著者が主張するもの）が明らかにされたのだが、それによるとシェルシは自分では全く音符を書かず、ピアノで即興的に演奏したものを録音して、それを協力者に書き取らせて自らの「作品」としていた、とされる。あるいはオーディオリーナという微分音（半音より狭い音程）を出せる鍵盤楽器を買ってきて、それを用いて「一つの音」だけを鳴らし（そもそもこのオーディオリーナという楽器は単音しか出せない）、それに微分音的な変化を加えたものを録音し、

さらにそれを逆から再生したものを管弦楽化する作業を若い作曲家にやらせてこれがあの「一つの音をめぐる四つの断片」になった、という（このあたり長木誠司さんの『前衛音楽の漂流者たち』筑摩書房に詳しい）。これが事実とすれば、彼の音楽のオリジナリティには深刻な疑念が生じることになる。

「わかるかね、マッシモ」といった呼びかけ、あるいはマッシモの語る「と、あの人は言いました」といったリフレインが文章に奇妙なリズムを作り、話は次第に作曲家の内的世界へと降りてゆく。一部を訳出してみよう。

しているのは、地にしっかりと足のついた音楽だ。音楽は、背筋を伸ばしてダンスを踊るべきであって、地べたを這い回ったり、ふらふらよろめいたりしちゃいけない。その類いの音楽は、ヴァグナーやマーラーでもう沢山だ。あの山だの湖だの頭が一杯になったドイツ人たちの音楽はもう沢山なのだ。彼らがどうしてあんなに山や湖に取り憑かれているか、わかるかね、マッシモ？とあの人は尋ねました。それは彼らの魂が病んでいるからなのだ。彼らの脚は大丈夫でも、彼らの魂は病みに侵されているのだ。こういったドイツ的病いから免れている私達は、とあの人は続けた。私達は、ローマのような街のまっただ中で生活しているも耐えられる。耐えられるどころか、山や湖など一年中見ることがなくても気にならない。魂を病んだ者たちだけが、山の中で過（こ）してみて、自分たち自身を確認する必要があるのだ。山で過（こ）し、花や小川なんかのことを音楽にし、世界中の花や小川や山々が立ち上がった。

て、もう十分だ！俺たちを放つてくれ！と叫びだすまで音楽を書き続けることになるのだ。ドイツの作曲家たちは自分たちの魂に風を通すことに忙し過ぎて、自分たちの衣服に風を通すのを忘れていた。（中略）私が話しているのは、ブラームスやシュトラウスのような立派なブルジョアたちの妙な臭いのする服のことだよ。下着にシャツ、チョッキにジャケット、コートにネクタイにスカーフに手袋に帽子…こういったもの全てに穢（けが）れが生え、古びていて、ドイツ中流階級の臭臭く古臭い臭いがする。それは汗と香水とタバコと真面目くさった憂鬱の臭いだ。これは藝術の法則だよ、マッシモ、とあの人は言いました。作品が清潔であろうとするなら、服も清潔でなくてはならない。」

たしかにフィクションという形なら、この風変わりな作曲家に迫ることもできるかもしれない、と思う。そしてこの小説を通して見る限り、彼はきわめて魅力的な人物である。



# 半島発大阪經由世界へ

## ノブリス弦楽四重奏団の足取り

音楽ジャーナリスト

渡辺 和

二十一世紀の今、韓国は独奏者・独唱者大国だ。弦楽器やピアノ独奏コンクールのファイナリストや優勝者にKimやLeeを見ないことはない。昨年九月のミュンヘンARDコンクール声楽部門など参加者の半数以上が韓国系で、社会現象として地元で話題になったほど。堤剛氏や東京クアルテットを生んだ六〇年代頃の日本を遥かに上回る勢いである。

だが、それはあくまでも独奏ジャンルでの話。二〇〇九年秋号『奏』に、そんな韓国にも出現し始めた室内楽志望若手演奏家たちについて記させていただいた。あれから足かけ四年、半島からひとつのスターが出現する気配が、世界に先駆け大阪が発見した才能ノブリス弦楽四重奏団(以下Q)である。

### ◆大阪にやってきたイケメン 四人組

大阪国際室内楽コンクール 一次予選が開始される前日、参加者説明会が開催される。第一部門に参加が許される団体ともなれば、世界中のコンクールの舞台で顔を見知った連中が数団体はいるし、国内参加者も室内楽界ではそれなりに知られた名前ばかり。説明会の席に全く知らぬ顔は殆どいないのがこのジャンルのちよつと特殊なところだ。団

体の成熟度が決定的要素となる室内楽大会は、独奏大会のような無名の天才は出現しないものなのである。

二〇〇八年五月、大阪某所での説明会でイケメンなアジア系少年四人の姿を眺めた。チャラチャラした派手さはないが、それなりに自分らの見せ方を知っている空気が日本の学生らとは違う若者。真面目一本槍な中国系でもない。当時全盛を極めていた韓流アイドルみたい。案の定、韓国

国立芸術大学からのノブリスQなる団体だった。



2012年9月、ミュンヘンARDコンクール予選を終えたノブリスQ

予選には揃いの学生服のような衣装で登場したノブリスQは、「ロザムンデ」で訓練された端正な音楽を奏で、審査員や聴衆を驚かせる。正直、これまで大阪にやってきた韓国組は、個々人は達者だがアンサンブルとしてはまだまだ、という団体ばかりだった。意外と言っては失礼なノブリスQの健闘、筆者の取材メモには「ダークホース！」と大記きしてある。

しろ、借りたい若者は列を成しているのだから」。至極ごもつともな意見ではある。そんなプレッシャーに曝された若者らが、時間がかかる室内楽を敬遠しても当然だ。

財団が組織する若手アンサンブルのメンバー写真に見た顔があった。この青年はこの前の大阪国際室内楽コンクールで入賞したクアルテットの団員じゃありませんか、と訊ねてみると、ネエ(はい)、との応え。今は留学でバラバラになっていて、彼はソウルにいてこのアンサンブルに入ってくれている。クアルテットは続けるつもりで、コンクールの準備はしているということですよ。

とはいももの、ロンドンにもバンフにも、はたまたポルドーにも、ノブリスQは姿を見せなかった。ロンドンではとても弾ける十六歳の美少女を第一ヴァイオリンを擁し、彼らの母校の名を冠した団体がセミファイナルまで進出、一部関係者の注目を集めた。やっぱりあのイケメン君四人組はダメだったか、なに

しろ韓国の二十代前半男子には徴兵の義務もあるし……。

ソウルがすっかり冬の気配となった二〇一〇年秋の終わり、訪れた世宗文化会館横の楽器店店頭でノブリスQのポスターが貼られていた。クリスマス頃の公演で、メインは



2010年暮、ソウルの世宗文化会館近くの音楽ショップ前に貼られたノブリスQ演奏会のポスター

シューマンのピアノ五重奏曲。留学している連中が休暇に故郷に集まり練習します、という感が漂う演目である(どうやら団としては一年ぶりの公演だったようだ)。どんな形であれ、続いていて良かった。続けさえすれば、春も来る。

### ◆ミュンヘンから

そして、昨年九月のミュンヘンである。ベルリン在住の日本の若者やら、サイトウキネン勉強会で学んだ初の日中

自分らの演奏を終え、別の団体を聴くために客席に姿を見せたところを捉まえ立ち話をしてみると、母校で原田幸一郎氏や今井信子氏にマスタークラスを受けているとのこと。なるほど、ちゃんと弾ける筋の良い若者らが、学ぶべき事をきっちり学んだなら、しつかりした音楽となるのも当然。その先はご存じの通り、本選まで進出、過去の韓国団体最高位の三位を獲得した(韓国の団体が世界のメジャー室内楽コンクールで入賞したのは、これが史上初だったとのこと)。とりわけ「抒情組曲」の完成度の高さは見事だった。結果に喜ぶ若者たちに、この先あちこちで顔を合わせるるだろうね、と祝福しつつ、無事に続いてくれれば良いのだがと願う以上は出来ないのが歯がゆかったものである。

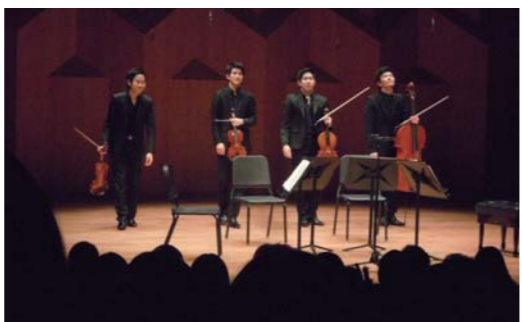
### ◆苦難のとき

そう思ったのは理由がある。ノブリスQは、一昨年からミュンヘン音楽大学に弦楽四重奏として留学し、室内楽科主任のポツペンに学んでいたという。ツボを押さえた古典作品の再現も、それで納得する。コンクール時点であと一年の留学は決まっているとのこと。この結果で、団も続けられるかも、と喜びを隠せない。コンクールの結果が、そのまま団の維持に関わる、そんな厳しい現実には若者たちは勝った。

審査員のひとりに拠れば、決め手となったのはやはり一次予選でのベルクとのこと。「筋の良い団体なので、順調に伸びられるといいのだが。ええ、あのコンクールの結果、クアルテットが続けられそうだからという話は後から聞きました。自分ら審査員としても、彼らに関しては良い結果を出せたと思っております。」

去る十二月、ソウル・アーツセンターの室内楽ホールで、ノブリスQ久々の地元自主リサイタルが行われた。ミュンヘン凱旋公演となったこのコンサート、ソウルの音楽仲間

や親戚も多数詰めかけ、熱い声援が飛び交っていた。



2012年12月、ソウル・アーツセンター室内楽ホールにて、ミュンヘン・コンクール凱旋演奏会

終演後、ロビーで若い女性に取り囲まれいつまでもサインと記念写真に応じるイケメン君たちに、遠くから手を振る。おお、来てただね、って驚いた顔。驚くことはない、そりゃ、大阪が見つけた才能だもの、見守りますよ。

この公演のチラシ裏に、「大阪国際室内楽コンクール入賞」という文字が最初に刷り込まれていたのは、言うまでもない。ノブリスQ、次の大きな仕事はニューヨークはカーネギー、ワイル・リサイタルホール公演である。



## 公益財団法人日本室内楽振興財団 支援企業

大阪ガス株式会社  
関西電力株式会社

三洋電機株式会社  
住友電気工業株式会社  
ソニー株式会社  
株式会社東芝  
日本電気株式会社  
パナソニック株式会社  
株式会社日立製作所  
富士通株式会社  
ローム株式会社

株式会社近畿大阪銀行  
三井住友信託銀行株式会社  
株式会社みずほ銀行  
株式会社三井住友銀行  
株式会社三菱東京UFJ銀行  
株式会社りそな銀行

住友生命保険相互会社  
東京海上日動火災保険株式会社  
日本生命保険相互会社  
三井生命保険株式会社

野村證券株式会社

アサヒビール株式会社  
サントリーホールディングス株式会社  
ハウス食品株式会社

東洋紡績株式会社  
株式会社ワコール

伊藤忠商事株式会社  
岩谷産業株式会社  
株式会社千趣会  
三菱商事株式会社

川崎重工業株式会社  
株式会社クボタ  
新日鐵住金株式会社  
ダイキン工業株式会社  
日立造船株式会社  
三菱重工業株式会社

株式会社日建設計

株式会社大林組  
鹿島建設株式会社  
株式会社きんでん  
株式会社鴻池組  
清水建設株式会社  
大成建設株式会社  
大和ハウス工業株式会社  
株式会社竹中工務店

非破壊検査株式会社

大塚製薬株式会社  
住友化学株式会社  
積水化学工業株式会社  
武田薬品工業株式会社  
日本ペイント株式会社

近畿日本鉄道株式会社  
京阪電気鉄道株式会社  
南海電気鉄道株式会社  
西日本旅客鉄道株式会社  
阪急電鉄株式会社  
阪神電気鉄道株式会社

株式会社JTB西日本  
株式会社電通  
株式会社ニューオータニ

KDDI株式会社  
西日本電信電話株式会社

株式会社読売新聞東京本社  
株式会社読売新聞大阪本社  
日本テレビ放送網株式会社  
読売テレビ放送株式会社

(関連業種別50音順)

### ■ 北イタリアの都・ミラノ ■

ミラノはイタリア北部ロンバルディア州の州都で、人口130万余を数え、首都ローマに次ぐイタリア第二の都市である。地勢的に交易上、軍事上の要衝にあって古くから栄えたが、そのことが却って各国・王朝・公国の利害の的となり、統治者の交代が続いた歴史を持っている。ローマが政治の中心であるのに対して、ミラノは古くから服飾、繊維産業が盛んでミラノコレクションがよく知られている。近年では重工業、精密工業なども発達して今やイタリアで最大の経済圏を形成している。スポーツにおいてもサッカーチームのACミラン、インテル・ミラノなどはつとに有名である。

市内には後期ゴシック様式のミラノ大聖堂(ドゥオーモ)やイタリアオペラを中心として知られるスカラ座やピッコロ・テアトロなど建築、音楽、美術にかかわる施設が多くみられるのはイタリアに発したルネッサンスの名残なのだろう。また、ミラノと大阪市は姉妹都市となっている。

因みにイタリアの国土が現在の形になったのは第一次世界大戦後のことである。(表紙:ミラノ)



ミラノ大聖堂(ドゥオーモ)



## 平成24年度 第2回理事会開催

平成24年度第2回理事会が、平成25年3月21日(木) ホテルニューオータニ大阪で開催されました。冒頭、秋山会長の挨拶があり、その後、越智理事長が議長となって平成25年度事業計画及び収支予算書の承認と平成24年度臨時評議員会の招集の2件が審議され、可決承認されました。

会議の終わりに、玉越事業プロデューサーから第8回大阪国際室内楽コンクール&フェスタの概要についての説明がありました。

## 平成24年度 臨時評議員会開催

平成24年度臨時評議員会が、平成25年3月25日(月) ホテルニューオータニ大阪で開催されました。

会議の冒頭、越智理事長の挨拶があり、その後、評議員の互選で村上仁志評議員を議長に選出して先の理事会で承認された平成25年度事業計画及び収支予算書が審議され、可決承認されました。また、評議員2名の選出についても可決承認されました。

会議の終わりに、理事会同様、玉越事業プロデューサーから第8回大阪国際室内楽コンクール&フェスタの概要についての説明がありました。

なお、新たに選出された評議員は次の方々です。

評議員 稲垣 直 (鹿島建設)  
岸本 正美 (きんでん) (敬称略)

宮本一評議員(株式会社きんでん特別顧問)は平成25年1月に逝去されました。



理事会



評議員会

## 平成25年度助成金交付予定事業決定

平成25年度の助成金交付事業は1月31日(木)の選考委員会で厳正な審議を経て、申請総数28件のうち選考対象外を除く17件のうちから9件が選考されました。

〔選考委員〕 委員長 藤田 由之 (指揮・音楽評論家)  
委員 青澤 隆明 (音楽評論家)  
委員 根岸 一美 (同志社大学教授)  
委員 三宅 幸夫 (慶應義塾大学名誉教授)  
委員 横原 千史 (音楽評論家)

## 調査研究事業委員会の調査報告書刊行

調査研究事業委員会は、1月に2005年から2009年の5年間にわたる「近畿地区(2府4県)における室内楽演奏会の実施状況に関する報告書」を刊行しました。また平成25年度以降も引き続き2010年以降の実態調査を継続していくことが承認されました。

〔調査研究事業委員会〕 委員長 梅本 俊和 (大阪音楽大学名誉教授)  
委員 網干 毅 (関西学院大学教授)  
委員 黒川 浩明 (大阪アーティスト協会会長)  
委員 根岸 一美 (同志社大学教授)

# せわしい日常から抜け出して 自然の息吹をたっぷりと感じよう。

高度情報化社会の到来により

コンピューター普及による社会生活の変化、高度なサービス、あらゆる時間の短縮化などあらゆる面において恩恵を受けています。

しかし時間や行動において効率ばかりを押し進めるばかりに、今では逆にストレスとを感じる面があるようです。

効率化により次々と詰め込まれていく日常、ゆとりのない毎日。

自然に還り、リフレッシュする機会を必要としていませんか。

JTBは、世界各地にちらばる癒しのスポットをご案内し、旅のお手伝いをいたします。



**JTB西日本  
海外旅行西日本支店**

〒541-0053 大阪市中央区南久宝寺町3-1-8(本町クロスビル9階)

TEL.06(6252)2711(代) FAX.06(6252)2790

担当:飛松 智久

●編集・発行／公益財団法人 日本室内楽振興財団

〒540-8510 大阪市中央区城見2丁目2番33号 読売テレビ内

TEL.(06)6947-2183 FAX.(06)6947-2198

ホームページ <http://www.jcmf.or.jp>

e-mail [zaidan@jcmf.or.jp](mailto:zaidan@jcmf.or.jp)